

大東亜の〈外国人〉

——接触空間としての上海漫画家クラブ——

木田隆文

はじめに—上海における〈外国人〉

日本統治下上海の文化状況については、これまで日本／中国の二項対立的構図でとらえられることが多かったように思われる。たしかに1937年の第二次上海事変とそれに続く駐留英米軍撤退、租界還付という流れの中で、上海の英米勢力はその支配機構からは一掃され、かわりに日本と中国の同盟／対抗関係が浮上した。そのため、日本側の文化工作とそれに対する中国側の反応にその関心が向けられるのは当然のことであったといえる。だが改めて上海が国際都市であったことを考えたとき、そこには依然として同盟関係にあったドイツ・イタリア、フランス（ヴィシー政権）の人々、さらには無国籍避難民であるユダヤ、白系ロシアなどの〈外国人〉¹⁾が多数残留していたことに思い当たる。

しかしこれまで日本統治下上海の文化状況を考える際に、彼ら外国人の文化活動とその意味が十分意識されてきたとは言い難い。近年になって、大橋毅彦を中心とするグループが蘭心大戲院（ライシャム・シアター）に注目し、白系ロシア人・ユダヤ人らを含む多民族の文化接触を検討する仕事²⁾が出始めているが、まだその端緒は開かれたばかりである。

本稿もそうした状況を補完すべく、日本統治下上海における外国人の文化活動と民族間の文化接触の問題を、「上海漫画家クラブ」という団体を例に考えてみたい。同クラブは日本の上海統治が本格化した1942年に、宗主国側の日本人を中心に、和平側中国人、白系ロシア人、ユダヤ人、ハンガリー人などの外国人を加えて発足した漫画家集団である【図1】。この日本統治下上海の縮図ともいべき多民族集団の活動を追うことは、戦時上海における外国人の文化活動の一端を明らかにするとともに、日本の文化統治政策の実態を考える事例になると思われるからである。



【図1】上海漫画家クラブ「上海生活風俗漫画展」記念写真（加東みの助年忌発起人会編『みの助の思い出』1959・10、口絵写真）

ところで、こうした民族構成を持つ上海漫画家クラブを考えるうえで、メアリー・プラット「コンタクト・ゾーン」³⁾は示唆的な概念であろう。植民地や占領地という空間を、支配者／被支配者双方の出会いの場としてとらえ、両者の間で生じる様々な相互干渉をとらえる視点は、これまで支配的であった抵抗／従属といった対立的なとらえ方を脱却し、より有機的な関係性をあぶり出すと思われるからである。本稿もその視点に倣い、各民族間の対立・支配関係の解明にはあまり重きを置かない。それよりもむしろ、この上海漫画家クラブという場において、異なる民族・立場を持った会員同士がいかなる文化的接触を果たしたのか、またそれが彼らの表現活動にどのような実践や変容をもたらしたのかを考えてみることにしたい。

1. 上海漫画家クラブの背景

これまで上海漫画家クラブについては、上海史、漫画史双方においてもほとんど検討されたことはなかったようである。そこでまずは上海現地で発行された邦字新聞『大陸新報』の記事を参照しつつ、この会の成立経緯を確認しておきたい。

同紙に上海漫画家クラブの動向が現れるのは「国籍を問はず互いに励み合ふ 上海漫画家クラブ誕生」(1942.3.8, 第3面)と題する記事が最初である。

在上海漫画家は国籍の如何を問はず相互に切磋し合ふべき□□上海漫画家クラブ結成の話が急速に進められ七日午後二時半から南京路トリコロール三階で第一回会合が行はれた。／参会者はサバジョオ氏(露国) シフ氏(オーストリー) マックス氏(ハンガリー) 日本側は可東みの助氏、三井直麿氏の五名、中国側は「鉄扇公主」の例の萬兄弟□□□□□□当日は不参、今後毎週土曜日に上海画廊に会合、忌憚なき意見の交換を続け、さらに会員の推薦によつてメンバーを増し連絡を緊密にする事となつた。／なほ漫画クラブの第一回事業としては四月中には全会員合同の上海生活漫画展覧会を開催する予定である。(□は判読不能)

この記述によれば、会の結成は1942年3月7日であったようである。だがその会合の時点で早くも翌4月の漫画展覧会の開催が決定している旨も記されており、会の設立準備は、第1回会議の開催されるはるか以前から進んでいたこともうかがわせる。また会員についても、結成当初から可東みの助をはじめとする日本人と、サバジョウ・シフ・マックスといった外国人、そして中国初の長編アニメ映画「鉄扇公主」の監督であった萬兄弟といった中国人によって構成されていたことが示されており、すでに計画の時点で、会に国際的な性格を持たせることが決定していたことも読み取れる。

実際そうした事情は、会の中心を担った可東みの助の回想にも示されている。

「上海漫画クラブ」は民国三十一年四月に結成されたもので、英国の機関新聞であつた「ノース・チャイナ・デリー・ニュース」の専属漫画家として過去二十年政治漫画を描きつゞけ上海の一名物となつてゐたサバジョウがドイツの機関紙「ヌーン・エキストラ」に転身、

反枢軸から枢軸へと宙返り以上の大転向をみせた大東亜戦争勃発直後、仲介者があつて可東みの助と会談したことから話が発展し在滬漫画家の親睦団体を作らうといふ事になつて出来上がったのである。⁴⁾

ここでみの助は、会が発足した直接の理由に、上海を代表する漫画家サパジョウがイギリス系から枢軸国側のメディアへと転身したこと、またそれを契機に「仲介者」が漫画団体の結成を主導したことを挙げている。「仲介者」が誰であったのかは未詳であるが、おそらくみの助自身が所属した大陸新報社の関係者であったと推定されよう。

みの助は最初画家を目指し幸内純一門下で研鑽を積むが、やがて映画に関心を移し、映画雑誌の出版社・豊国社に入社。雑誌「キネマ」の記者として映画記事や俳優等を題材にしたイラストを多数発表するとともに、漫画家として活動を開始した人物である。上海へは1940年春ごろに大陸新報社の招聘によって渡り、同紙を中心に現地で多くの漫画を発表していった。そのみの助が所属した大陸新報社は、陸海軍・外務省・興亜院のバックアップによって造られた現地最大の新聞社で、設立経緯が示すように、上海現地の言論政策と極めて密接にかかわっていた。

その大陸新報社の関係者が、同社社員のみの助と枢軸国側メディアで活動をするサパジョウを結びつけたということ、またその二人を軸としてこの会が発足するに至ったという事情を考え合わせると、上海漫画家クラブの設立目的には、在滬外国人に対するプロパガンダ工作があったことが垣間見えるのである。

2. 「上海生活風俗漫画展」をめぐる温度差

そしてこうした上海漫画家クラブに寄せられる翼賛的な期待は、会員の中に萬籟鳴・古蟾兄弟が加えられていることからもうかがえる。中国のディズニーとも評される萬兄弟は、この時期中国初の長編アニメ映画「鉄扇公主」を制作し、上海映画界において大きな影響を持った映画人であった。会結成の直前、『大陸新報』紙上にはみの助と萬兄弟の対談が連載されているが⁵⁾、こうした動きからも萬兄弟の参加に大陸新報社の意向が働いていたことと、中国側への言論工作への期待があったことが暗示されているのである。

だが改めて萬兄弟の活動を眺めてみると、彼らは大陸新報社の期待とはうらはらに、会とは距離を置こうとしていたように感じられる。他の会員はたびたび大陸新報紙上に作品を発表しているが、萬兄弟の作品はほとんど見当たらない。また先に引用した上海漫画家クラブの設立を報じる記事(1942.3.8)でも、発足集会に欠席していることが報じられている。

この萬兄弟の対応は、国策協力への期待に対して、会員たちが必ずしも一枚岩ではなかったことを示しているだろう。実際それは、彼らが定期的に開いた展覧会「上海生活風俗漫画展」の様子にも顕著に表れている。展覧会の様子を報じた「風俗漫画展 けふから上海画廊で」(1942.4.26, 第3面)と題する記事によれば、同展覧会は大陸新報社の後援で、「二十六日から三十日まで南京路上海画廊で開催され」、「五月上旬大陸会館ギャラリーで再び催され、さらに五月下旬には東京に進出し銀座松屋で開催の予定」と、半期ごとに3回にわたり開催されたようである。また「皆な傑作揃い 賑わふ風俗漫画展」(1942.4.28, 夕刊第2面)では「上海で初

めての試みであり知名の漫画家の傑作がズバリ揃っているので大変な人気を呼んでゐる。第一回の二十六日には観覧者三千名を数し、日本人、外国人が多いのが目についた。／作品は飛ぶように売れ、殊にサバジヨ^{ママ}、シフ氏の作品は殆ど全部売切れといふ景気のよさであつた」と示される盛況ぶりであつたことが記されている。

この展覧会の出品作品は、『上海生活風俗漫画展作品集』として公開されているが、その作品集の題名が示すように、会員個々の出品作品もすべて上海の生活風俗を描いたスケッチ類で、翼賛的な題材を描いたものはひとつとしてなかった⁶⁾。そのことは、みの助を含む会員たちが、自らの漫画を文化工作や宣伝戦と切り離して考えていたことを示している。大陸新報社の期待をよそに、上海漫画家クラブは上海に暮らす画家たちの対等な交流の場として機能し、会員たちもまた自らの表現的欲求を充足させる場所として利用していたのである。そしてそれだからこそ、記事にあるように「三千名」もの在滬日本人・外国人が展覧会に押し寄せ、作品を買収求めたのであろう。上海漫画家クラブとその展覧会は、まさに国際都市上海にふさわしい文化交流の場であつたのである。

3. 上海漫画家クラブへの攻撃

だが、上海漫画家クラブの自由な創作活動が花開きはじめたこの時、同じ上海の文化界では彼らに対抗する動きが生じはじめていた。

「漫画で民衆啓発 昨夜日華漫画座談会」(1942.8.7, 第3面)

反英米協会主催の反英米日華漫画座談会は六日午後七時から金門飯店で開催、日本側から可東みの助、三井直麿、中国側から□函美、江東良、董天野、黄也白、劉震春など二十名の日華漫画家は出席、協会側から王秘書長、陳総務部長が列席した。／〔中略〕今後反英米協会を母体として日華漫画家を打つて一丸とする日華漫画家研究団体を創り、緊密な連携のもと民衆の啓発に努力しやうと申合せ、同十好成績裡に終了した

「協力を誓つて― 昨夕漫画協会幹部会」(1942.8.18, 第3面)

さきに結成された中国漫画協会では十六日午後六時から静安寺路金門飯店で幹部総会を開き、萬兄弟、古蟾、江伯夷、シフ、マックスをはじめ錢文家黄嘉模、日本側岩永式平氏ら数十名が参集して近代思想戦における漫画家の使命達成のため協力することを申合せ盛會裡に散会した

この二つの記事に拠れば、上海漫画家クラブ成立の半年後に、新たな漫画団体「中国漫画協会」が結成されたことがわかる。そしてまた記事は、この協会の母体が現地翼賛団体である反英米協会であつたこと、さらにその目標が「日華漫画家を打つて一丸と」し、「民衆の啓発」、「近代思想戦における漫画家の使命達成」とする、強硬な翼賛性を持った団体として企図されたことも示されている。そしてなによりこれら記事で注目すべきは、上海漫画家クラブ会員のみの助、萬兄弟、シフ、マックスらがそこに糾合されたことが記されている点である。この事実は、日

本側の文化統治のプレゼンスが強化される中、上海漫画家クラブの会員たちもまた、日本の文化統治政策から逃れることができなかったことを示しているのである。

このように現地翼賛団体が漫画家を糾合してゆくことは、漫画が上海の言論政策において重視されていたことの証左でもあろう。だがその翼賛漫画に対する期待は、裏返しとして、自由な創作活動を行っていた上海漫画家クラブ会員への攻撃にもつながっていった。

中山康夫「上海漫画クラブ第二回展を観る(上)(下)」(1942.11.25, 第6面／1942.11.26, 第4面)は、上海漫画家クラブの第2回展について「現在の時局下における漫画展とあらば当然大東亜戦争を中心としたいはゆる時局漫画がその中軸であらうと誰しもが想像するところであるが、この展覧会にはさうした作画上の制約が何もない」と、その時局意識の薄さを指弾する。そのうえでサパジョウ・ゲラシモフ・フレーデン・マックスといった外国人漫画家の作品を酷評し、その不徹底さが「此のクラブのリーダーである日本側漫画家の責任」にあると評している。また鄭「第三回上海漫画展評 余りにも低俗な 時局認識のない外人画家」(1943.5.19 夕刊3面)と題する記事においても、同じく外国人漫画家の作品が酷評され、「筆者は何故可東、桐島両氏のような優れた漫画家がこれらの時局認識も指導性も持たない低調な外人達と一緒に展覧会を開くのか不思議でならない」と、外国人漫画家の時局認識の薄さと、それに連携する日本人漫画家たちに疑問を呈し、「中国の漫画家をも交へてもつと正道をゆく漫画展を開催したらといふものだらう」と、翼賛的な中国漫画協会との連携を促している。

このように『大陸新報』には、外国人漫画家たちの時局意識の低さと、その責任をみの助を中心とする日本人漫画家の責任に帰す論調が横溢してゆく。そしてその批判は、やがて外国人漫画家に対するみの助の態度にも影響を与えてゆくことになる。上海漫画家クラブ結成から約2年後、みの助は上海漫画家クラブの活動を以下のように総括した。

〔…〕現下の世界情勢に即応し、大東亜民族一丸となつて決戦に突入すべき民意作興の展覧会なり刊行物なりを纏める為には、このクラブの主要メンバーである外人漫画家はサパジョウをのぞいて全く価値なき風俗漫画家にすぎず、サパジョウにしてもヌーンエキストラで生活を保障されているから枢軸側、特にドイツのため宣伝漫画を描くといふ「飼はれた漫画職人」であつて、大東亜建設の理想を顕現すべき情熱ある漫画を期待するなどは不可能である。結局「上海漫画クラブ」としては研究所を設けて此処に若き素質良い中国人を集めて、外人漫画家の持てる「技術」を習得せしめることが時局に貢献する適切な道であるが、未だそこまで行つてゐない⁷⁾

ここでみの助は、漫画を「決戦に突入すべき民意作興」の道具と位置づける。そればかりではなく、かつての盟友サパジョウが思想性のない「飼われた漫画職人」であり、「大東亜建設の理想を顕現すべき情熱ある漫画を期待するなどは不可能である」と批判、さらには彼を含めた外国人漫画家たちを中国人漫画家たちの技術向上の道具にすることが「時局に貢献する適切な道」とまで言い切るようになるのである。いうまでもなくこの論理は、かつてみの助を攻撃した翼賛側の論理構成と同じである。みの助はそれをそのまま利用し、かつての仲間であった外国人漫画家を切り捨てたのである。こうしたみの助の姿には、宗主国側の人間にもまた政治的

プレゼンスがもたらす屈曲が与えられうること、またその立場にあるが故に、よりいっそう複雑な内面を抱えることがありうることが示されている。

4. 〈外国人〉たちの位置

こうした外国人漫画家たちへの攻撃は、彼らが民族的に〈大東亜共栄〉・〈日華提携〉の理想と相容れない要素を持っていることと無縁ではないだろう。ロシア・ハンガリー・ドイツといった国籍を持つ彼らは、日本側の立場から見て明確な敵ではなく、かといって心情的に味方とは言にくい。また民族的に見てもアジア系ではない彼らは、大東亜共栄の理念を寿ぐ者たちにとっては極めて扱いにくい存在だからである。

だが言うまでもなく、これら外国人漫画家に対する批判は的外れである。先に見た上海漫画家クラブの展覧評は、その翼賛性の欠如に焦点が当てられていた。だが彼らの催した展覧会のタイトルが「生活風俗」展である以上、そこに翼賛的なテーマを期待するのはないものねだりでしかない。しかも本来彼らは大東亜共栄・日華提携とは無関係な立場にあり、翼賛的なテーマを描く内的必然性はどこにもない。その彼らを日本側の文化空間に呼び寄せ、そのうえで日本側の価値基準から攻撃するのは、ねじれた論理としか言いようがないのである。これら外国人漫画家に対する批評から浮かび上がるのは、彼らの表現活動を、自らの理想実現の文脈に横領しようとした、日本側の文化政策の傲慢さそのものなのである。

ところでやや余談だが、こうした外国人の存在を日本側の論理の中に回収する発想は、日本統治下の上海で描かれた文学テキストの中にも散見される。

小泉譲「お前の胸に日の丸を」(『上海文学』第3号 1944.4)は、上海在住の日本人作家を中心に結成された上海文学研究会の機関紙『上海文学』に掲載された小説である。上海文学研究会もまた上海漫画家クラブと同じく大陸新報社の影響下に結成されており、同誌掲載の本作また、以下の梗概のように翼賛的な内容が強く感じられるものとなっている。

*

英国人の父と日本人の母の間に生まれた混血の少年トミイは、山田富夫という本名を持つ。彼はフランス租界に暮らし、日本人街に足を向けても、「日本人がなぜか自分の肌に合わず、冷たいまなざしだけを感じて慌てて租界へ逃げ帰ってしま」うような、自他ともにイギリス人として育ってきた少年であった。日本語も十分に話せないトミイの様子を案じた彼の叔母は、知りあいの久保にトミイの日本語教育を依頼する。するとトミイの日本語はすぐに上達し、やがて久保は、彼の「心を日本人に仕上げなければならないのだ」と「責任を強く感じ」、トミイに「日本人のあらゆる道徳の根幹になる尊皇の精神などに就いて」も教えるようになる。トミイもまたそれに応え、「自分が日本人であると云ふことを誇りに感じ、日章旗の美しさを素直に感じられるようになりたいと懸命」に勉強に励むようになる。そうした日々を送っていたさなか、大東亜戦争が勃発。トミイは徴兵検査を受けるべくその準備に邁進し「兵隊になれば必ず第一線に立つのだと云う」気持ちで周囲にもにじませる。そして久保が彼に日本語を教え始めてから二年後、トミイは無事兵役に合格する。

*

トミイは半分日本人の血が入っているとはいえ、内面はイギリス人である。他の民族を教育によって日本人化し、日本の兵士にまで仕立て上げるという話型は、同時期の台湾原住民を日本兵化した高砂義勇兵や、満洲映画のストーリーと極めて近接した発想であり、この作品もまた、他の民族を大東亜共栄の理念に回収してしまう暴力的な欲望に満ちているといえるだろう。だがここで小泉をとりあげたのは、彼の翼賛性を指弾しなかったからではない。むしろ上海での小泉が、外国人に対する多様な対応を示していたことに留意しておきたかったからである。たとえば小泉は現地刊行の総合雑誌『大陸往来』に、上海のユダヤ人たちを描いた「少女テレゼ 上海碼頭風景」(1940.12)、「追放者の家」「追放者の家(続)」(1941.6～7)を連載するが、その際彼らが住むハイムに赴き直接取材を行い、流亡するユダヤ人を哀切に満ちたまなざしで描き出した。むろん「お前の胸に日の丸を」とユダヤ人を描いた作品を比較する際、戦時下の日本人が抱いた民族イメージの差は考慮しなければならない。だがこの小泉の外国人に対するまなざしと、外国人漫画家を彼らの持つ民族性のみに依拠して攻撃した「大陸新報」の批評を比べれば、小泉が外国人に親身に寄り添うまなざしを持っていたことは明白で、しかもその表現を、媒体の傾向に応じて多様にかつ柔軟に使い分ける感性をもっていたこともわかるのである。

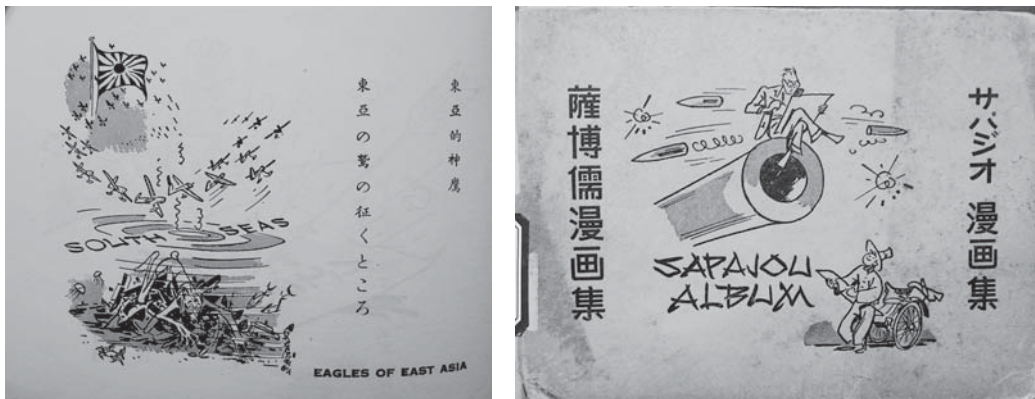
5. おわりに―〈外国人〉として生きること

しかし、この時と場合によって柔軟にその表現の態度を変えてゆく小泉譲のふるまいは、日本統治下の上海に生きる芸術家にとっては普遍的な行為であったのかもしれない。事実それは、上海漫画家クラブの中心的メンバーであったサパジョウ (SAPAJOU) の生き方とも共通している。

白系ロシア人であるサパジョウは、ロシア革命後、ハルビンでの滞在を経て1922年に来滬。以後永らくイギリス系のノースチャイナデیلیーニュースの専属漫画家として活動し、アジア太平洋戦争開戦後はドイツ側のヌーン・エキストラに転身、同時に日本人を中心とする上海漫画家クラブにも加わるという、複雑な経歴と立ち位置をとった⁸⁾。そしてその複数の民族を生きた複雑な経緯は、彼が日本統治下において刊行した画集『サパジョ漫画集』⁹⁾によく表れている。この画集の出版元はドイツの情報局であり、その内容も、もともとサパジョウの漫画に付されていた英語のキャプションに、中国語と日本語の説明が加えられるといった多言語の構成を持っている【図2】。

白系ロシア人であるサパジョウは、亡命直後から上海租界の支配者であったイギリスの言語を習得し、それを駆使して自らの表現をなし得てきた。だがその地位が失われるとき、上海の新たな盟主である日本に近い枢軸国のメディアに移動し、かつて敵側のメディアで生み出した作品を、新たな支配者のプロパガンダの道具としてそっくりそのまま差し出した。『サパジョ漫画集』の体裁は、まさに彼の複雑な経歴と立ち位置をそのまま反映しているのである。

時と場合により、身の置き方や方針を次々に変えてゆくサパジョウ。それは可東みの助が痛烈に批判したように、無節操な生き方にも見えよう。しかしさまざまな文化的ポリティクスと一線を引き、生活のための漫画を描き続けた彼の創作態度に、思想性や表現者としてのプライドを当てるのは、我々の傲慢さを映し出しているのかもしれない。



【図2】『サバジオ漫画集』表紙（右）および内容（上海図書館徐家匯蔵書樓蔵）

上海というコンタクト・ゾーンで、支配者たる日本に対し、迎合も抵抗も必要のない外国人として暮らす表現者たち。彼らが生きるために多かれ少なかれ持ち合わせた変わり身の早さは、決して批判されるべきものではない。生きるための芸術という立場を貫いた、その逞しさこそを我々は評価すべきではないだろうか。

注

- 1) 日本の居留民社会においては、欧米系の人々を〈外国人〉と呼称することが一般的であった（本稿引用の新聞記事にも同様の例が散見される）。本稿もその例に倣い、〈外国人〉を欧米系の人々の総称として使用している。
- 2) 大橋毅彦他編『アジア遊学 183 上海租界の劇場文化—混淆・雑居する多言語空間』（2015・4 勉誠出版）など。
- 3) Mary Louise Pratt [1992] *Imperial Eyes: Travel Writings and Transculturation*. London: Routledge なお本稿で参照した「コンタクト・ゾーン」の概念については、田中雅一「コンタクト・ゾーンの人文学へ」（田中雅一、船山徹編『コンタクト・ゾーンの人文学 第Ⅰ巻 —Problematique / 問題系—』見洋書房 2011・4）に多くを拠っている。
- 4) 加藤己之助（＝可東みの助）「Ⅳ・上海漫画界の三十年」（上海市政研究会編『上海の文化』1944.3）
- 5) 「大陸新報」に掲載された萬籟鳴・古蟾兄弟とみの助の対談関連記事は以下の通り。
 - ・「和平讃ふ民衆映画 漫画『長江の家鴨』 鉄扇公主に次ぐ力作」（1942.1.29 3面）
 - ・「萬兄弟とみの助 日華漫画談義 けふの夕刊から掲載」（同上）
 - ・「〔漫画映画漫画対談1〕主人公の「漫彫」で表情動作に苦心 動機はディズニー漫画」（1942.1.30 夕刊2面）
 - ・「〔漫画映画漫画対談2〕家鴨の後を追廻す兄弟の姿こそ「漫画」 千代紙映画は欠損」（1942.1.31 夕刊2面）
 - ・「〔漫画映画漫画対談完〕苦勞して恵まれず貧乏しても亦樂し 国境のない「漫画稼業」」（1942.2.1 夕刊2面）
- 6) 『上海生活風俗漫画展作品集』掲載作品の題名は以下の通り。
 - ・マックス：午前八時／南京路の街角
 - ・可東みの助：標準型と国籍不明型／夢の四馬路の花売娘
 - ・シフ：上海の香り／雨の姑娘

- ・馬午：四馬路の宵
 - ・フレーデン：街頭歯医者／引越し
 - ・太平龍：此の盛況／楽しかりし昔
 - ・サパジョウ：ポークチャップの出生地／黄浦江の小艦隊
 - ・三浦乃重：上海の邂逅
 - ・萬籟鳴：乞食
 - ・三井直磨：上海ッ子／黄包車夫最後の夢
 - ・ゲラシモフ：街の理髪師
- 7) 加藤己之助(＝可東みの助)「Ⅳ・上海漫画界の三十年」(上海市政研究会編『上海の文化』1944.3)
- 8) サパジョウの経歴については以下を参照した。
- ・「[国際まんぐわ放談] 君も猿・僕も猿 上海自体が漫画材料」(『大陸新報』1942.3.15 夕刊2面)
 - ・Nenad Djordjevic Sapajou: The Collected Works of Old Shanghai's Greatest Cartoonist The Early Years China Economic Review Publishing 2010.8
- 9) サパジョウ『サパジョ漫画集／薩博儒漫画集／SAPAJOU ALBUM』
German Information Bureau Shanghai MAX NOESSLER&Co. SHANGHAI 1943

※本稿は連続講座「越境する民—接触／排除」第3回「コンタクト・ゾーンとしての上海—文学・メディアから浮かび上がる対立の諸相」での報告を文章化したものである。ただしその際の報告内容は拙稿「上海漫画家クラブとその周辺—『大陸新報』掲載記事を手掛かりに」(高網博文他編『戦時上海のメディア—文化的ポリティクスの視座から』2016.10 研文出版)をもとにしており、本稿もその内容と大きく重なっていることを断っておく。

※本稿で引用した新聞記事は、いずれも『大陸新報』掲載のものである。

※本稿は科学研究費(基盤C)「汪兆銘政権勢力下における日本語文学状況の基礎的・発展的研究」の成果の一部である。

